

在ネパール日本国大使館 平岡邁特命全権大使 閣下

私たちは、このたびのネパール政府による「チベット人難民福祉事務所 (TRWO) の突然の閉鎖を、非常に遺憾に思います。

1959年以来今日まで、40年以上にわたって中国からチベット人難民が流出しつづけていること自体大きな問題だと思いますが、これまでネパール政府はそうした問題を理解した上で「代表部事務所」並びに「TRWO」の存在も認めていました。だからこそ現在も2万人以上のチベット人がネパールに暮らし、また多くの難民たちがTRWOの援助でネパールを経てインドに脱出できたのです。

「難民」とは、戦禍を逃れる人たちがばかりをいうではありません。今の中国では、かつてのような”あからさま”なチベット人弾圧はみられません。けれどもチベット人たちは自由にものを言うことはできません。たとえば、つい最近の出来事からです。

若者がふたり、強がり言いながら歩いていました。一方が「そんなにお前が強い男なら、ここで”プー・ランゼン”と叫んでみる」といい、言われた男は”プー・ランゼン”と叫びました。たまたま通りのそこには盗聴マイクが仕掛けられた場所だったため、若者は公安に捕らえられ「国家反逆罪」で3年の実刑を受けました。刑期を終えて釈放されましたが、職を失った彼は今ホームレスになっています。(”プー・ランゼン”は、「チベット独立」という意味)

また、学校教育の中でチベット語も教えられてはいますが、ここで生きていくにはチベット語よりも漢語が断然有利です。言葉も文化も消されようとしています。自分のアイデンティティを否定されるような毎日なのです。

そしてまた、学校教育を受けられない地域や、貧しくて受けられない子どもも数多く居ます。

こうした息詰まるような日々を逃れようと、また自らの誇りを持ち続けようと、またあるいは、教育を受けたい、子どもに教育を受けさせたいと難民となって逃れる人、子どもを送り出す親があとを絶ちません。

ご承知のようにネパールには現在およそ20,000人のチベット人難民がいますが、カトマンドゥの難民事務所は難民の生活福祉に関わり、また国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) を通して、そうした難民たちをインドへ送る手助けをしていました。その事務所が閉鎖されたことで、難民たちの保護活動に支障をきたすことは明らかです。

今回の閉鎖措置は、こうした難民に対する支援活動を阻害するものに他なりません。人道的見地から許せることではありません。どうぞ、貴大使館におかれましては、ネパール政府に対してすみやかにこの閉鎖措置をとくようご説得をお願いいたします。チベット難民が置かれているあやうい地位への御理解と、今後も増え続けるであろう難民への人道的支援に水面下でのご協力をいただきたいと願います。かつて貴大使館にはそのように水面下でご協力いただいていた経緯もあります。どうぞ、今回は是非お力をお貸しください。お願いいたします。

ネパール政府に対して強く申し入れできるのは、日本国においては他にないと思われまます。

カトマンドゥのチベット人難民事務所再開を訴える有志の会

私は、上記の「カトマンドゥのチベット人難民事務所再開を訴える有志の会」と他団体/機関のメッセージに賛同いたします。

住所

氏名

2005年 月 日